

一村さんの姓は、何処からのものであるうか。とても、親しみ易い姓であるが、そう「あちこち」に無い姓で珍しい。

私事であるが、祖父は一村さんに世話になったから、大事な親戚と思え、と言うのであった。

祖父が、根上村の村長になった時代に、寺井駅までの現在ある道路の土地を買収する事になった時の裁判所に出した書類に、住所・福嶋のよの百十一番地になっている。

米沢本家から、新しい所帯を持ち、稲積から祖母を迎えたとき、恐らく無一文であつたらう、との有様が伺える。

よの百十一番地は、一村さんの地所である、そこで菜種油を灯油として売り、新所帯を持ち頑張った、様子が伺える。

兄貴分の稲積榮作は明治末年に、根上村の収入役になっていたからその知恵もあつたのだと思う。

藩政末年の、嘉永三年の「綿打ち」の書類が残されている。

福嶋村では、庄吉・茂兵衛・円右衛門・甚七・太郎衛門・伝七・

源六・安右衛門・九郎右衛門・甚助・善七の拾一軒が綿打ち商売をしており、根上村全体では六十五軒が綿打ちをしているので、需要のある商売であつたのだろう。

坂野さんも、初めは綿打ちをされていたらしいが、少年の頃の記憶がない。

乃木大将のような髭の爺さんと、優しい婆さんの記憶が懐かし

明けても暮れても、「きよんさ」は、気楽に出入りできる、家であつたし、私の兄弟全部が可愛がつて貰った。

向かいの若林の、「やよんさ」で「あぶらげ」と豆腐を製造していた。

何時見ても、おばばが、片肌脱いで豆腐汁を機械にかけて絞っていたし、大きな平たい鍋に、「狐色のあぶらげ」が煮え立っていた。

当時の何処も同じだったのだろうが、玄関の右か左に便壺が埋められており、子供心に落ちそうで恐かつたものだ。

また、あちらでも、こちらでも「どうき」と呼んだ糞瓶が藁屋根を被つて道筋に置かれてあつた。

また、側溝が整備されていないので、家々の下水が流れ放しになっていた、「懐旧の念」、昨日のようである。

若林さんの所に、大阪から寺窪さんが、帰つてきた。

一年生の私は、静枝さんと学校で一つ机で並ばせられた。

静枝さんは、自分のことを「ちこちゃん」と言つたので「ちこちゃん」と並んだ私は鼻高々であつた。

「うち、どないしよ」という、大阪言葉が今でも思い出す。

「ちこちゃん」は早死にした。

彼女の家の前に、柚子の木が繁つて、秋に黄色い実を結んだのが懐かしく、ねんねの時代を、最近とても鮮明に思い出す。